

第1回講演会 学校におけるいじめと暴力

—— 米国のスクールカウンセラーの立場から ——

講演者 カリフォルニア州カウンセラー協会前会長 ダリル・ヤギ

1998. 7. 25

私は小中学校のカウンセラーであり、大学でカウンセラーを養成する立場にある。そしてデータ収集や観察に基づいて介入プログラムなどの提起といったアクションを目標とする「アクションリサーチ」に関心を抱いている。研究者ではなく実践家としての立場から、スクールカウンセラーとして現場で援助を実践してきた中で経験したことについて述べていきたい。

問題の所在は、いじめや暴力そのものにあるのではなく、それらに対して私たちに何ができるのか、ということにある。いじめや暴力はどの時代にも見られる非常識な行為であるが、とりわけ今日いじめは増えており、突然、暴力に形を変えることがある。いじめに文化や国による境界はない。いじめる者は支配と権力を求め、それは暴力的行為に繋がっていく。暴力について伝えるニュースに、私たちの生きている社会的状況は示されている。米国では小学生が学校に銃を持ち込み先生や生徒が殺され、日本では中学校にナイフが持ち込まれ先生が殺された。無差別の暴力的行為が、法と正義に基づく国家の中にあまねく見られるようになっている。

いじめを含め、事象の捉え方には文化差がある。米国の教育者は、いじめは容認しがたい行動であり、迅速な対応と厳粛な措置が必要であると考えている。米国のように率直にはっきりと人がものを言う社会におけるいじめとは、心理的社会的欲求に対する内的、外的反応である。欲求不満、怒り、支配欲、権力などに関する個人的問題がいじめの温床となる。多くのいじめは直接的、意図的で、言語的かつ身体的なものである。米国では故意にぶつかったりということが多く見られる。言葉による虐待は感情的不安を呼び起こし、身体的虐待は体に傷を負わせる。一方、日本の教育者は、いじめを容認しがたいと考えておらず、表立った対応や措置も少ない。その要因としては、多くの責務が教師からいじめに取り組む時間を奪うとともに、教師の側でもいじめに対してなすべき事がわかっていないことが考えられる。日本の子どもは自分を言葉で表現することが少なく、いじめには心理的要素が多くなるようであるが、米国と同じような個人的問題からいじめは生まれ、同じような行為をもたら

しているようである。

日米間では、いじめの定義に差があるのではないかと思われる。日本のいじめが相手の品位を貶め心理的ダメージを与えるもので、目に付きにくいのに対して、米国のいじめはより攻撃的で身体的ダメージを与えるものが多く目に付きやすい。かつて私が日本の教師たちに対していじめの定義と実例について尋ねた所、いじめとは一人の生徒が多の生徒に対して継続的になされる心身を傷つける有害な行為であり、仲間はずれや無視、持ち物隠し、侮蔑的に呼ぶこと、いたずら電話などが含まれていた。しかしながら米国ではこれらはいじめと呼ぶのではなく、それぞれの行為をその名前の通り呼んでいるのである。また、暴力についても実例を挙げてもらった所、蹴る、叩く、髪の毛を引っ張る、脅す、物を壊す、動物をいたぶるなどが挙げられたが、米国ではこのような行為は暴力よりはむしろいじめとして取り上げられている。

日本の生徒たちは、彼らの個人的欲求に応えていない学校システムや、今日におけるクラス運営の仕方を教育されていない教師たちに対して反抗しているのではないだろうか。また、家族や近隣の子供と交わる時間やそこで培われる価値観に欠け、失われゆく家族に対して反応しているのではないだろうか。私が日本に来る2ヶ月前に目を通した新聞によれば、少年少女の暴力事件は過去最高を記録し、教師や友人たちへの暴力はこの5年間に2倍になったということである。個人的社会的ニーズの満たされなさが、こうした代替的な破壊的行動を生み出しているように思われる。日本の子どもたちはテクノロジーに親しむようになったが、その結果、さらに家族や友人との交流時間が減少し、自分の感情を表現するスキルや、思春期の激しい感情の変動に対処するスキルも持たずに学校に来ているようである。このような現代だからこそ、教師や親の理解が十分なければ、生徒たちはますます不安と混乱に陥り、外に向かう暴力へと傾いていく。子どもたちに対する理解が求められているのである。

いじめに対する生徒たちの対処方法と、生徒たちを取り巻く状況には、日米間で違いがある。日本では生徒た

ちは苛立ちを感じ(「むかつく」)、感情がコントロールできない(「キレル」と言われている。日本には「我慢する」という対処メカニズムがある。日本の教師や保護者は、いじめが起きた時に、長いこと我慢すれば状況が良くなると思っているようだが、重要なのは、何が生徒たちをいじめに走らせているのか、その意味を理解することなのである。しかしながら、社会の変化に伴い、子どもたちが友人と遊んだり互いに学び合うこともなくなり、地域の大人も昔のように子どもたちの行動を見ることがなく、教師たちにはいじめの問題に取り組む時間がなくなってきた。そして子どもたちは受験戦争を経験し、親の離婚など、常に緊張とストレスが高まっている状態にある。一方米国では、生徒の対処メカニズムは言葉によって表現したり体で反応することである。米国の子どもたちは自己を信頼し、援助を求める相手がいる。いじめや暴力に対する指針が学校にあり、明確な処置手続きもある。親や地域社会に住む人々がいじめや暴力に対する学校の指針を知っており、生徒の安全と福利をサポートする管理職やスクールカウンセラーが米国にはいるのである。

いじめが起きると、米国ではカウンセラーが生徒に会って気持ちを聞き、いじめとはどういうことかを明確にし、いじめの背景について話し合い理解しようとする。二人の生徒の間にいじめがあれば、その二人を呼び、どう揉め事を解決すればいいのかコンフリクトマネジメントを行なう。また、もし子ども間で解決しなければ校長や教頭の元へ呼ばれ、必要に応じて家族が呼ばれる。それでもいじめが止まなければ、書類にサインし、いじめについての記述を警察へ提出することもある。一方、日本ではいじめに対して学校が明確な指針や処置手続きを取っていない。そのために担任の教師がキーパーソンとなり、生徒指導の教師のサポートを受けながらいじめの問題に取り組んでいる。教室でいじめについて話し合ったり、いじめられている生徒に助言を与え抵抗するよう励ましたり、いじている生徒を咎めて調停したりしている。

日本では、いじめられている子は、落ち込み、惨めで、不安な思いをしている。自尊心を失い、他者を信頼できなくなっている。いじめられているという事実を他の生徒から隠したり、身体的症状をしめしたりする。また、すべてをあきらめ、生きていることがむなしくなり登校を拒否することがある。その一方、言い返したり、何かを試みたり、親や教師に話すことでいじめの生徒に抵抗することのできる自己主張的な生徒もいる。

米国のスクールカウンセリングプログラムには4つの

役割がある。第一にカウンセリングで、個別カウンセリングやスクールカウンセリングが含まれる。第二にコンサルテーションで、カウンセラーが親や教師、地域の施設と相談する活動である。第三にコーディネーションがある。第四にクラスルームガイダンスで、これは教師と協力して教室で行われるガイダンスである。

米国では20年以上前から、クラスルームガイダンスとして、子どもたちが自己と他者の理解を深め、自分自身を守ることを目的とした「社会的スキルトレーニング」が実施されている。子どもたちの問題の増加が、個人的、社会的、対人的スキルの重要性を高めている。子どもたちが自分を尊重し、相手を尊重できるようになるための「アサーティブトレーニング」が、社会的スキルトレーニングの一環として実施され、一人の人間として自己を主張する権利が自分にはあるのだということを生徒たちは学んでいる。攻撃的な行動、自己主張する行動というのがどのようなものなのかを知識として学び、いじめに対して自己主張する技術を教わり、それをロールプレイなどで身につけていく練習の機会が与えられている。また、コーディネーションプログラムとして、「ピアヘルパープログラム」が実施されている。これはある生徒が他の生徒を援助するようにトレーニングするものであり、上手に対人関係を結ぶスキルや社会的スキルを身につけ、他の生徒を理解できるようになることを狙いとしている。ここでは相手にアドバイスを与えるのではなく、相手の言っていることに積極的に耳を傾け、その感情を表現して抱えている問題を明確化できるように手助けするよう求められる。このようなプログラムが中学や高校で実施されている。さらにそれ以外のコーディネーションプログラムとして、「コンフリクトマネジメントプログラム」というものがある。これは二人以上の子どもたちの間で生じた誤解やからかいなどの問題を援助するためのもので、子どもたちは諍いを解決するためのプロセスをどうとるのか、そのプロセスを学ぶ。このプログラムは問題の解決を可能にするとともに、それ自体が問題の予防に役立つものである。

米国では、他の人とのチームワークの中で問題解決へ向けて行動し、その際に明確であることが求められる。それに対して日本では、一人一人が自分に課された役割を中心に動いており、曖昧であることが求められているように私には感じられる。日本の生徒は感情を押えがちで表現するのが難しく、時間が経てば事態が改善されるのではないかと願う傾向があり、教師たちはそれぞれの生徒の事例を個別に扱っている。米国の生徒はいじめに遭うと感情を直接的に表現して助けを求め、学校には

いじめを解決するための明確な指針の下に支援システムが存在している。どちらが好ましいかは別にして、日米間には違いがあるのだ。

私は以下に述べる3つの目的のために、日本での比較文化的臨床研究を引き受けるつもりである。第一に、学校と地域社会におけるいじめの文化的、教育的、臨床的ダイナミクスを調査すること。第二に、学校の教師とスクールカウンセラーのための教育方法とカウンセリング方法を学校や大学で発展させること。第三に、いじめと暴力の予防と改革に対するビジョンを持った学校改革プログラムを作成し実施することである。いじめは増加しており、事態は急を要している。いじめを終わらせるためには、勇気と行動、大胆な指導性が必要である。学校と地域社会を安全かつ快適な場とするために私の知識と技術を提供できるならば幸いである。

〔質問応答〕

フロア：データによれば、10代の殺人率や凶悪犯罪率は過去に比べて減少しつつある。殺人や凶悪犯罪が減りつつあるにもかかわらず、暴力やいじめが増えているという現象に対する印象を伺いたい。

ヤギ：暴力の増加は、社会に対する不安反応であると考えている。若い人は暴力とはどういうものであるのか、ということに対する価値観を確立していないし、個人の持つ権利とということについて十分考えることがないように思われる。10月に米国で起きた事件がそのことを象徴している。

フロア：ピアヘルパーについて。日本では朝から夕方まで同じ集団で過ごしており、集団の圧力が大きい。主流派がいじめに加担している状況でピアヘルパーが中立を保つのは難しいのではないかと。日本の現状を考えると、ピアカウンセリングと称していじめのようなことがなされてしまう恐れもある。日本にどのように導入すれば良いとお考えか。

ヤギ：日本への導入に困難が付きまとうというのは正しい指摘である。というのも、米国でも同様の意見がみられたのである。もちろんピアカウンセリングのプログラムを導入するにあたっては障害があると思われるが、今後私自身、さらに研究を進めパイロットプログラムを作成していきたい。

亀口：関連して、東大の附属でもピアヘルパーやコンフリクトマネジメントのプログラムを立ちあ

げる準備があります。いま懸念されたような点に配慮して工夫したいと私たちも考えているし、ヤギ先生のアドバイスもそういった意味で大切にしたい。

佐藤：先日出席した国際会議でも同じようなことが問題になった。ピアカウンセリングがプライバシーの点から問題にされるのでは、と質問すると、米国の出席者から、日本ではあくまでいじめをプライベートな問題として扱おうとするが、米国では差別や攻撃といった社会的問題として扱おうとする、という指摘を受けた。この文化差の存在は重要だ。

フロア：私立の女子校でスクールカウンセラーをしている。私はアサーティブトレーニングをしているが、勤務時間などの問題で時間的な難しさを感じている。トレーニングの頻度や対象学年、時間数などを教えていただきたい。

ヤギ：多くの場合アサーティブトレーニングは小学校の低学年を対象としている。というのも、この段階の子どもにそうした技術を身につけ、発展させて欲しいと考えているから。中学や高校でもそれが違う形で行われている。時間や頻度は学校によりけりである。学校の先生の時間や先生のニーズを考えねばならず、教師の協力が不可欠である。

フロア：スクールカウンセラーが一校に一人という学校も日本には多い。スクールカウンセラーが行き詰まった時に他のカウンセラーと相談できるような機関が米国にはあるのか。

ヤギ：米国のスクールカウンセラーのプログラムについてまず紹介する。カウンセラー志望の学生は大学院修士課程でカウンセリング心理学などを専攻し、一年目に勉強して二年目には実際に学校でその学校のスクールカウンセラーの下で働きつつ、大学教官のスーパービジョンを受ける。ライセンスを取得し就職すると、インターンとして現場でさらに修練を積むことができる。ここではスーパービジョンというよりは、経験豊富なカウンセラーがメンター（経験者によるサポート。緩やかな指導）として援助する。私の勤務する高校には4人のカウンセラーがいるが、それぞれが4人の新米カウンセラーを受け持っている。また、私の学校区には10人のカウンセラーがいるが、お互いの仕事を援助し合うという目的でミーティングを行なっている。さらに

米国では地域や州、国家のそれぞれのレベルで協会があり、カウンセラーを援助するためのワークショップが行われている。

佐 藤：メンターとは、より経験の深い人がサポートすることである。若い人がカウンセラーをしながらメンターの所に相談に行ける。スーパーヴァイズよりも緩やかな指導で、それが専門家協会の中で整備されているということが重要である。日本のスクールカウンセラーは一人で仕事をしていることが多いので、こうしたサポートシステムが非常に重要である。

フロア：私は韓国からの留学生だが、最近、韓国でも学校での暴力に注目が集まっている。いじめと非行とが別の問題であるような印象を日本で受けていたが、今日のお話を拝聴し、いじめと暴力は、文化差はあるものの質的には同じであるということが分かった。その点についてもう一度確認したい。

ヤギ：そう考えて構わない。始めに申し上げたように、少年非行あるいはいじめに関する明確な定義というものは存在しない。

藤 田：ヤギ先生の話に興味深く拝聴した。米国と日本とでは、いじめ、暴力、少年非行といった概念にかなり違いがある。具体的なお話しの中で、

米国では身体的な暴力が明確にいじめとして捉えられ、それに対応するプログラムが整備されているのに対し、日本ではいじめという言葉が幅広い行為に適用していることが分かった。こういった点は、私たちがいじめというものを日本で考え直す上で検討するに値するのではないだろうか。非身体的なものについては米国ではいじめには含めずそれぞれの名で呼んでいるというのも興味深い。また、アサーティブトレーニングのような教育プログラムだけではなく、それを実際の場面においてサポートするシステムがあり、いじめに対して明確な指針と対処法を持っている点が日本との現時点での違いであることが分かった。日本が今後どのような方向性に行くのか分からないが、大きな示唆を頂いた。いじめが自尊感情や人間性の侵害といった点からも重要な問題であり、緊急を要するという点についても再考が必要である。具体的にプログラムについて提示していただいたことにも感謝したい。

〔参考文献〕

『スクリーンカウンセリング入門＝アメリカの現場に学ぶ』ダリル・ヤギ著／上林 靖子訳（勤草書房 1998）